View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

吉備国際大学　保健科学部紀要　第19号，79 ～ 84，2009

作業療法学生の職業的アイデンティティと社会的スキル

岩田美幸　狩長弘親　三宅優紀　小林隆司

Occupational identity and Social skills of the Occupational student

Miyuki IWATA，Hirochika KARINAGA，Yuki MIYAKE，Ryuji KOBAYASI

要　　旨

【目的】医療保健福祉体験実習（以下、体験実習）における、実践教育のあり方を検討することである。【方法】対象は、体験実習を行ったＡ大学の作業療法学科学生 41 名であった。質問紙調査は、職業的アイデンティティに関する 32 項と社会的スキルに関する 18 項目、体験実習中の作業療法士との会話の有無について行った。これら合計得点と下位項目について相関関係を解析した。【結果】１）職業的アイデンティティと社会的スキルが関連していることがわかった。２）職業的自負と社会貢献への志向が関係することがわっかた。３）実習中に作業療法士と会話がある学生は、職業的アイデンティティと正の相関がみられた。【結語】体験実習は、職業的アイデンティティと社会的スキルを養う実践教育の場として有益であると考えられた。また、実習中の作業療法士との会話が、より高く職業的アイデンティティに影響を与えると示唆された。

キーワード：職業的アイデンティティ、社会的スキル、体験実習、作業療法学生
Key words：Occupational identity，Social skills，The experience training，A Occupational student

緒　　言

筆者らは、作業療法教育の重要課題である３・４年時に行われる臨床実習の施設訪問時や終了後に指導者より、臨床実習の合否に関係なく学生のモチベーションの問題や基本的マナー不足の問題を指摘される機会を多く体験するようになった。その後、学科教員で意見交換を行いこの問題には、１）職業的アイデンティティを含めた人間形成が未成熟であること、２）社会的スキルが低いことがあげられ、これらが相互に関係していると考えられた。そして、両者において入学初期からの継続的な指導の必要性を感じている。

これらの問題の解決策の一つとして以前から、当学科１～３年生を対象に医療保健福祉施設体験実習（以下、体験実習）を選択科目に設けている。体験実習は、４月に手引きの説明と簡単な諸注意を行う１コマのオリエンテーション後、夏休みになり急に学生生活から乖離した６日間の現場実習を体験する。その後、規定の書式へ実習の内容と感想を記録し担当教員へ提出し終了する経過を踏む。現在は、学生に職業的アイデンティティや社会的スキルが備わっていることが前提にあり、もちろん学生の主体性により十分な実習が行われていたと考える。

しかし、2007 年度の私立大学全入学時代の到来により、学生の学力や価値観が多様化しているため、低学年において教育場面のみならず、私生活についてまで指導や配慮を要するようになった。同様に、体験実習についても、指導者より職業的アイデンティティや社会的スキルに対する具体的な教育が行えていないとの指摘も受けていたため、限られた時間のなかでどのように指導すべきか困惑している。

そこで、本研究では、今後の１・２年次からの職業的アイデンティティの形成や社会的スキルの向上につながるような指導の検討に先立ち、両者を養う

吉備国際大学保健科学部作業療法学科
〒 716－8508　岡山県高梁市伊賀町８
Department of Occupational Therapy, School of Health Science, KIBI International University
8, Iga-machi, Takahashi-City, Okayama, 716-8508, Japan

表１　実際に使用した職業的アイデンティティの調査

医療系学生の職業的アイデンティティの調査

設問：医療保健福祉施設体験実習を終えて、下記の質問に対して、自分の気持ちにもっとも当てはまるものを、数字から一つ選んで○をつけてください。

	まったくない	少しある	まあまあある	かなりあった	非常に多くある
1 OTが自分に合っていると感じる	1	2	3	4	5
2 OTを選択したことは良かったと思う	1	2	3	4	5
3 OTとして作業療法の世界に貢献していきたい	1	2	3	4	5
4 常に自分らしく働けると感じている	1	2	3	4	5
5 OTとして患者の願いに応えたいと思っている	1	2	3	4	5
6 OTを生涯続けようと思っている	1	2	3	4	5
7 OTとして患者に貢献していきたい	1	2	3	4	5
8 OTを志していることを誇りに持っている	1	2	3	4	5
9 患者に必要とされるセラピストになれると思う	1	2	3	4	5
10 OT以外の仕事は考えられない	1	2	3	4	5
11 OTとして社会に貢献していきたい	1	2	3	4	5
12 OTとして他人ができない独自の成果を出したい	1	2	3	4	5
13 医療の世界で不可欠な存在になれると思う	1	2	3	4	5
14 OTを志すものとしてこれからも成長して行けると感じている	1	2	3	4	5
15 OTとして医療の発展に貢献していきたい	1	2	3	4	5
16 背景に独自の学問を持てると思う	1	2	3	4	5
17 OTを志す学生であると他人に誇りを持って言う事ができる	1	2	3	4	5
18 OTという仕事をつうじて人間として成長して行ける	1	2	3	4	5
19 現実社会の中でOTとして自分らしい生き方ができるようになると思う	1	2	3	4	5
20 作業療法のあり方について自分なりの考えを持っている	1	2	3	4	5
21 患者を支えることができると思う	1	2	3	4	5
22 現実社会の中で、自分の可能性を十分に実現できるようになると思う	1	2	3	4	5
23 OTになることが自分らしい生き方だと思う	1	2	3	4	5
24 OTとして医師との関係においても独自性を発揮できるようになりたい	1	2	3	4	5
25 OTとして自分らしさがでてきたような気がする	1	2	3	4	5
26 これからも多くの人に必要とされるセラピストになれると思う	1	2	3	4	5
27 自分がどんなOTになりたいのかはっきりしている	1	2	3	4	5
28 将来自分らしいOTができるようになると思う	1	2	3	4	5
29 自分がどんな作業療法をしたいのかはっきりしている	1	2	3	4	5
30 医療チームの一員として、今後益々必要とされるセラピストになれると思う	1	2	3	4	5
31 医療チームの一員として独自な貢献ができるようなセラピストになれると思う	1	2	3	4	5
32 自分らしい作業療法をしてゆくことができると思う	1	2	3	4	5

下位項目（質問番号）

職業的自負（9、13、16、21、25、26、30、31）
自己成長への自信（1、2, 6、8、10、14、17、18、19、23）
社会的貢献への志向（3、5、７、11、12、15）
医療職観の確立（4、20、22、24、27、28、29、32）

目的で行われる体験実習において職業的アイデンティティと社会的スキルがどのような現状であるかを検証することを目的とした。

研究方法

1．対　　象

A 大学作業療法学科学生の１学年 41 人とした。なお、本研究の対象学生は研究実施にあたり条件として、研究以外に使用しない、責任をもって管理保管し個人情報の漏洩を防止すること、本報告に際しては個人が特定できないように十分配慮すること、研究の目的、研究の方法、公表する際の方法を口頭で説明し、研究の同意が得られた学生とした。

2．調査期間

X年９月下旬の体験実習報告書の提出時に実施した。

3．調査方法

職業的アイデンティティの調査には、藤井[1]の看護学生らに対して実施した「医学系学生における職業的アイデンティティに関する調査項目」（表１）を用いた。社会的スキルの調査には、1998年の菊池[2]によって年齢とともに平均値が高くなることが証明されている Kikuchi's Scale of Social Skills：18 items（以下、Kiss-18）を用いた。また、藤井[1]が職業的アイデンティティの形成には、自己の職業に対するモデルの影響が大きいことを述べていることから、学生の体験実習中のモデルとなりうる作業療法士との会話の有無について（以下、OT 会話の有無）調査を行った。そして、記入の際には無記名とし、集合調査とした。

4．調 査 表

職業的アイデンティティには、表１のように質問項目の合計が 32 項目で構成されている。これらの質問に対して被検者は１から５の５件法で回答する。採点は、質問項目１つにつき５点を配点し、職業的アイデンティティの下位項目ごとの平均点と合計得点を算出する。算出された平均点数が高いほど下位項目の志向性が高いと判断する。ここでは、下位項目は、畑田[3]が時間的展望を踏まえた職業的アイデンティティと未来展望への関係の「自己成長への自信」「医療職観の確立」「職業的自負」「社会的貢献の志向」を用いる。

Kiss-18 の調査表は、18 項目で構成され、質問項目１項目につき「いつもそうだ」から「いつもそうでない」の５から１の５件法で回答する。採点は、質問項目１つにつき５点を配点し、合計得点が高いほど社会的スキルが高いと判断する。下位項目は、「問題解決」「トラブル処理」「コミュニテーションスキル」があり各下位項目の合計得点を算出する。

5．分析方法

調査表から得られたデータをもとに、畑田[3]の職業的アイデンティティの合計と下位項目の平均値を参考値に、被検者の志向性をまず検討した。次に、社会人スキルの合計を菊池[2]の先行研究の数値と比較検討した。最後に、職業的アイデンティティの得点と性別、社会的スキルの得点、OT 会話の有無について、項目間の相関関係を Spearman の順位相関を用いて検討した。解析ソフトには、SPSS12.0J for Windows を使用した。

研究結果

質問表に回答した学生すべての解答が有効であった。分析結果は、表２、３、４に示した。職業的アイデンティティの結果から、合計の平均値は参考値とおよそ変わりがないが、下位項目の「自己成長への自信」が参考値より高く、「医療職観の確立」が低い傾向であった（表２）。そして、社会的スキルは、被検者の男性と女性とも参考値の大学生に近い数値を示した（表３）。次に、職業的アイデンティティと社会人スキルに正の相関が有意にみられ、特

表２　職業的アイデンティティの結果

下位尺度名	本研究	参考値
職業的自負	3.74	3.4
自己成長への自信	4.77	3.8
社会的貢献への志向	4.34	4.17
医療職観の確立	2.34	3.36
職業アイデンティティ合計	3.89	3.68

参考値は、畑野らの本研究対象年次と同学年のものである（2008 年）
数値は、平均値を示している

表３　性別の得点及び先行研究との比較

	本研究	参考値			
		成人	大学生	短大生	高校生
男性　平均（標準偏差）	56.5(±6.24) n=15	61.8(±9.41) n=45	56.4(±9.64) n=83		53.98(±7.45) n=106
女性　平均（標準偏差）	57.9（±8.37） n=26	60.1(±10.5) n=51	58.3(±9.02) n=121	56.8(±7.01) n=112	53.47(±9.06) n=57

参考値は、菊池のものである（1993 年）

表４　職業的アイデンティティと Kiss-18、実習中の OT 会話の有無との相関

職業的アイデンティティの下位項目と合計		Kiss-18の下位項目と合計					
		性別	問題解決	トラブル処理	コミュケーション	合計	OT会話有無
職業的自負	相関係数	−0.105	0.382	0.174	0.148	0.285	0.068
	有意確率	0.512	**0.014**	0.276	0.356	0.071	0.677
自己成長への自信	相関係数	−0.120	0.178	0.190	0.163	0.222	0.424
	有意確率	0.454	0.265	0.235	0.310	0.163	**0.006**
社会的貢献への志向	相関係数	0.073	0.298	0.316	0.212	0.376	0.380
	有意確率	0.650	0.058	**0.044**	0.184	**0.015**	**0.015**
医療職観の確立	相関係数	0.127	0.011	0.023	−0.018	−0.019	0.267
	有意確率	0.429	0.947	0.887	0.909	0.908	0.096
合計	相関係数	0.017	0.321	0.269	0.190	0.321	0.396
	有意確率	0.915	**0.040**	0.089	0.234	**0.041**	**0.011**

値は、Spearman のローによる相関係数。有意ものに下線を引いた

に、下位項目では、「職業的自負」が高い場合、対人関係において問題解決能力が高く、「社会的貢献への志向」が高い場合が対人関係においてトラブル処理能力が高くなる傾向がみられた。最後に、OT との会話が職業的アイデンティティと「社会的貢献への志向」と有意差がみられた（$P < 0.05$）。その上、OT との会話が、「自己成長への自信」に大いに関係することがわかった（$P < 0.01$）（表４）。

考　　察

筆者らは、作業療法教育の重要課題である臨床実習の遂行にあたり、職業的アイデンティティと社会的スキルが相互に関係していることと、学生の学力と質の低下があると考えている。藤井ら[1]は、Erikson のアイデンティティを①個体発達分化図式の発達的危機の概念への着目、②「アイデンティティの感覚」の定義に基づき、青年期が自我同一性いわゆる個人としてのアイデンティティの形成が求められると同時に、専門職過程の学生は、専門職に対するアイデンティティの形成も求められると述べている。このことからも、作業療法教育において自己形成のために他者との関係を構築する社会的スキルの向上と専門職過程の職業的アイデンティティの形成が重要であると考えられる。

前者の社会的スキルの向上では、今回の研究から、菊池[2]らが 10 年前に行った社会的スキルの結果と大差ないことが判明した。ここでは、最近の学生の社会的スキルは、10 年前の学生より低下してないと考えられる。しかし、菊池自身[4]が長年の研究をへて Kiss-18 は、スキルそのものを測っているのでなく、そのことについての当人の「自分は、この程度スキルが身についている」と言う認知を測っているのではないかとの疑いがある。それは、本人の主観を測っていると考えられると述べている。今回

の場合、実習終了後の指導者は学生の社会的スキルが低下していると感じ大学側へ報告しているが、現代の学生が感じる社会的スキルの自己評価が過去の学生と同じであった。そこに他者評価と自己評価の乖離があると考えられた。このことからは、今回の研究において社会環境が異なっているが学生が自己の社会的スキルを環境に応じて内在化した結果であるとも考えられる。そのため、青年期の社会的スキルの測定には、自己評価を他者評価と比較検討することが必要であると考えられた（表３）。

後者の職業的アイデンティティでは、Erikson[5]は、アイデンティティが社会的期待と個人的選択の統合の結果であり、文化的価値の内在化した最終的産物であると述べている。今回の研究において、下位項目の「自己成長への自信」からは、学生が自分の職業に作業療法士を選択したことに誇りをもつなど、作業療法士になることで自己成長への希望が現れていると考えられ、同時に自己の選択に対する自己評価の高さが伺えた。反面、医療職観の確立の結果から、自己の専門職に対するはっきりした職業観が形成されておらず、１年生からの職業的アイデンティティの形成が困難であると考えられた。これは、１年時は専門科目の少なさなどカリキュラム上の問題も考えられ、藤井[1]と同様な結果となった。また、野口[6]が日本という文化・社会的背景を考慮した作業療法の体系がまったくといっていいほどできていないと述べていることから、専門的アイデンティティの確立が難しいとも考えられる。しかし、藤井[1]は、同じ医学系学生であってもその理論的背景や社会的役割の差異によってアイデンティティの様態は異なるため、職種ごとの特徴をよく踏まえ、学生の職業的アイデンティティに対する教育の必要性を述べているため、作業療法教育において職業的アイデンティティの形成に関する教育が重要であると考えられる。

では、１・２年の専門科目が少なく、他職種の学生との同授業を行うなかで、どのようなことが早期に具体的な職業的アイデンティティを形成することにつながるのかを考えた場合、本郷[7]がモデルを「観察者に必要で意義のある行動をする人であり、観察者にとって学習の強化に影響力を持つ人」、モデリングを「観察者がモデルの観察を通して必要な行動様式を修得したり、促進的あるいは抑制的な影響を受ける現象」と定義し看護学実習における教員のロールモデル行動に関する研究を行っている。これらは、作業療法教育では、実習先で出会った作業療法士、大学の授業で出会った作業療法士の教員などに当たると考える。そして、今回の結果より、体験実習中の作業療法士との会話がある学生ほど、職業的アイデンティティが影響し、作業療法士を選択した自己評価のみならず、対象者や社会へ対する社会的貢献の志向も新たに芽生えていると考えられた。つまり、入学初期の学生に対しては、具体的な作業療法士との接触が自己の成長への手助けになると考えられた。そして、作業療法士がいない実習施設で体験実習を行った場合は、大学教員が学生の体験に対して共感し、より具体的な専門的知識を加えた知見を伝えることが必要であると考えられた。

以上のように、職業的アイデンティティと社会的スキルについてなんらかの相関があることが考えられ、青年期に当たる入学時から職業的アイデンティティの確立と社会的スキルの向上を目的とする体験実習が果たす欲割りは非常に大きいと考える。そして、社会的スキルは、自己形成において他者との関わりを行う上で重要な能力であり、加えて、対人援助サービスである作業療法教育においては、対人関係能力を客観的に測定する必要性があると考える。

今後は、体験実習でより充実した教育を行うために、自己評価について、他者評価による振り返る作業が重要であると考える。社会的スキルについては、多くの手法が開発されているため、授業に取り組むなどの工夫が必要であると考える。職業的アイデンティティの発達を進めるためには、多様な視点を気づかせてくれる他者の存在と、他者の視点に呑み込まれず、自分とは異なる視点を生かすことを取り入れた具体的な指導法を考案したいと考える。

Abstract

（Purpose）The purpose of this study is to examine the way of a practical education on the experience

training at the medical, welfare, and health centers. (Method) Participants were students at the department of occupational therapy at A university who participated in the experience training (in total 41 students). In a questionnaire, I investigated certain items－32 items on the students' occupational identity, 18 items on their social skills, and whether or not they had any conversations with occupational therapists during the training. I then considered a correlation between these total scores and the subordinate items. (Result) The findings reveal the following three points: (1)the students' occupational identity associated with their social skills; (2)their pride for the occupation related to their aims for a social contribution; (3)the students who had a conversation with occupational therapists highly involved their occupational identities. (Conclusion) To conclude, the experience training can be useful for cultivating the students' occupational identity and social skills as the field of a practical education. In addition, the above findings can indicate that whether or not the students had any conversations with occupational therapists influenced their occupational identity.

引用文献

1）藤井恭子，野々村典子，鈴木純恵　他（2001）医療系学生における職業的アイデンティティの分析．茨城県立医学大学紀要第７巻：131－142

2）菊池章夫，堀毛一也（1994）社会的スキルの心理学．川島書店：179

3）畑田早苗，北野知地，坂東奈保子　他（2008）医療系学生における職業アイデンティティと未来展望の関係について．リハビリテーション教育研究第 13 号：171－174

4）菊池章夫（2007）社会的スキルを測る：Kiss-18 ハンドブック．川島書店：2－21

5）E.H. エリクソン岩瀬庸理訳（1973）アイデンティティ－青年と危機－金沢文庫

6）野口正成（1991）作業療法および作業療法士について－日本作業療法士協会第９回学会誌シンポジウム「私の考える OT」

7）本郷久美子，舟島なをみ，杉森みど里（1999）看護学実習における教員のロールモデル行動に関する研究 . 看護教育学研究第８巻１号：15－18